

序章

第1節 はじめに

1、本論の目的と背景

本論では長崎諏訪神社祭礼（長崎くんち）を舞台に、風流の精神が生き続けた奉納踊の変遷と、それを維持し続けた踊町の運営の実態を考察するものである。

長崎くんち（以下くんちと記述）は、現在 59 町（長崎伝統芸能振興会調べ）が 7 組に分かれ 7 年にいちど奉納している。各踊町が龍踊、龍船、太鼓山（コッコデシヨ）、鯨の潮吹き、唐人船、オランダ船、竜宮船、南蛮船など自慢の出し物で競い合う。しかし町によっては順番が回ってきても、経費や人手の問題で参加を辞退するところや、また特別出演として本来の順番以外の年に参加することもある。「長崎くんちの奉納踊」は昭和 54 年（1979）国の重要無形民俗文化財に指定されている。

くんちは寛永 11 年（1634）に始まり、2 人の遊女が神前に小舞を奉納したことに始まるといわれる。踊町（江戸時代は「御供町」と称した）が踊を奉納するので「奉納踊」という。長崎は元龜 2 年（1571）の開港以来、キリシタンの町として発展し、キリスト教の信仰が盛んであったが、キリスト教禁令の後、長崎の住民は諏訪神社の氏子となり、くんちに踊りを奉納することになった。歴代の長崎奉行はくんちを重んじ、御供町には経費を貸し出した。

寛文 12 年（1672）から、長崎の惣町 80 町の内、出島町（オランダ商館）を除き、丸山町・寄合町の両町は毎年、77 町が 7 年にいちど奉納した。神輿の先導として、丸山町寄合町を先頭に 13 の町が延々と行列した。「御供町」という言葉はその意義を説明している¹。諏訪神社での奉納は卯の刻（現在の午前 6 時）に始まり、丑の刻（正午）頃までかかったという²。

きわめて政治性の高かったくんちであったが、それを長崎町人は自らの楽しみに変化させていった。7 年にいちど巡ってくる踊町は、周到に準備をする時を得て、各町の趣向を競わせることにもなった。当初は「通り物」といういわば仮装の行列が主流であったが、趣向を凝らしたものが出現してくる。

港町として開かれていた長崎の町人は、他都市祭礼の演目も柔軟に取り入れた。堺の船乗りは「堺壇尻（布団太鼓）」、呼子の鯨取りは「鯨曳」を伝え、それを踊町の人々は工夫を重ね洗練した出し物に仕上げている。「太鼓山（コッコデシヨ）」や「鯨の潮吹き」などのくんち名物に育てた。

また中国やオランダの風俗や習慣である「龍踊」「媽祖行列」「阿蘭陀兵隊の行列」も取り入れ

た。海外から船で象がやってきたときは、「象の曳物」が登場するなどニュース性も盛り込んだ。「本踊」は、所作台や書割、大道具を担いでまわり、踊馬場で舞台を組み立て、歌舞伎のさわりや所作事が演じられた。

明治維新で、江戸幕府から明治政府に変わり、九州鎮撫総督(後に長崎府知事)として長崎に赴任した沢宣嘉はくんちの華美さに驚き、諏訪神事の改革を行い、奉納踊を廃止したが、澤が長崎を離れると従来の姿を取り戻していった。明治時代になると、船を踊馬場で曳き回すというようなパフォーマンスも行われるようになった。

長崎くんちが「風流(ふりゅう)」という美意識を色濃く反映させた祭礼であると定義付けたのは、国立歴史民俗博物館制作の研究映像「風流のまつり 長崎くんち」(2001年・94分)が最初であった。

福原敏男³、久留島浩⁴、植木行宣⁵ら民俗、歴史、祭礼の研究者と地元から原田博二⁶が監修に加わったプロジェクトで調査と検証がなされた。

制作者のひとりである植木行宣は「長崎くんちは練物の祭であり、登場する出し物は時々の流行を取り入れた趣向に満ちた踊りや作り物を主体に展開していた⁷」「出し物に新趣向を盛り込み生き生きと展開し続けるのが練物の祭りの本質である。それは近世都市祭礼の原点でもあり、その本旨を生き生きと受け継ぎ展開させてきたのが長崎くんちである⁸」とその著書で述べており、この研究映像の企画者であり制作者である福原敏男は「風流とは(略)そこには競合の心が流れており、その趣向はしばしば豪華華麗を競って奢侈に流れ、相手の意表をつくことから奇抜さへと傾いていった⁹」と記し、くんちの風流が踊町間で競合することにより、成り立ったことを示唆している。

結果的にこの研究映像は「風流の祭り 長崎くんち¹⁰」とタイトルが付けられ、ナレーションでは「風流とは、斬新なアイディアにより毎回目先を変える趣向で見物人を驚かすこと」と説明している。

風流という美意識をもっとも象徴しているのは傘鉾であろう。長崎では当初、単純な出しと短い垂れで軽々と担ぎ上げていたが、時代とともに趣向がなされ、垂れには輸入物の羅紗などの高価な布を使用するなど、町印として豪華に発展した。出しにはビードロ細工やからくりが用いられ、垂れには長崎刺繍を施すなど美術工芸としての価値も高めた。傘鉾は全国の祭礼や盆行事にみられるが、山や鉾に姿を変えるのではなく、1人持ちの形状を残したまま最大の大きさに発展したのが長崎の傘鉾の特長である。

また、明治中期には傘鉾の持ち手がそれを回すというパフォーマンスをするようになり、

風流における作り物と行為の一体化がなされた。

江戸時代後期は、豪華な傘鉾の制作費ほか傘鉾に関する諸経費を一軒で負担する「傘鉾の一手持ち」とよばれる素封家が現れ、踊町に貢献した。

昭和 20 年以降のくんちに関しては、平成 25 年（2013）3 月長崎純心大学大学院人間文化研究科博士課程前期で修士（学術・文学）の学位を授与された論文「長崎くんちからみる地域住民の社会的関係について～戦後の踊町運営を中心に～」(のちに一部加筆して『長崎くんち考』（2013 年長崎文献社から出版）として発表しており、本論は江戸時代、近代を中心に検証した。

なお、くんちは神幸行列とそれを先導する御供町行列とから成り立っていたが、この論考では神事についてふれておらず、踊町（御供町）を中心に論じている。

2、くんちの先行研究

次に長崎くんちに関する今日までの学術研究の流れを概観し、主要な研究について若干のコメントを加えたい。

今回、主に参考にしたくんちに関しての先行研究としては以下がある。

- ・古賀十二郎「諏訪神事」『長崎市史風俗編』P.365-434 長崎市役所 大正 14 年（1925）

長崎の郷土史研究の基礎を築いたとされる古賀十二郎の執筆である。文献や絵画史料をもとにくんちの成立、奉納踊、行事や習慣など、幅広く考察し、「くんち通史」ともいえる論考であり、後世の多くの研究者が参考にしている。当然ながら大正末までの記録をもとに記述されている。

- ・古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人 前編』新訂版 P.329-362 長崎文献社 平成 7 年（1995）

この著書は古賀の遺稿を元長崎県立図書館長永島正一が中心となり前後篇として昭和 43 年（1968）刊行した。「第二章 丸山遊女 第九節遊女及び遊女屋と神社仏閣」の「諏訪大祭と遊女の小舞」「丸山町寄合町両遊女町の踊り銀拝借」の項では、寄合町丸山町両町の遊女とくんちの関りについて検証しており、他の踊町とは異なる遊女町の行事や踊町運営、奉納踊について考察されている。

- ・林源吉「長崎の傘鉾」『長崎談叢第五輯』P.1-24 長崎史談会 昭和4年(1929)

くんちの傘鉾の歴史及び、時代的な趣向の変化を検証し、大正末から執筆当時の傘鉾の大きさや費用、傘鉾持ちなどについても記録している。また、執筆年(昭和4年)当時のすべての踊町の傘鉾75基の出し、垂れの趣向を調査して記録している。傘鉾に特化した研究で、傘鉾についてはもっとも詳細である。
- ・越中哲也「長崎くんち考」『長崎純心大学博物館研究第八輯 長崎百話長崎文化考(其の2)』P.46-130 平成14年(2002)

文書と絵画史料をもとにくんちの歴史と奉納踊の変遷、傘鉾における美術工芸品について考察している。特に初期のくんちとキリシタンの関係や、くんちと博多との関連について言及している。
- ・久留島浩「長崎くんち考」『国立歴史民俗博物館研究報告第103集』P.79-115 平成15年(2003) 国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館が収蔵している「長崎諏訪神社祭礼図屏風」からくんちにおける近世城下町祭礼の基本的な要素を抽出し、他の祭礼と比較しながらくんちを近世都市祭礼として位置づけている。この論考により、くんちを近世都市祭礼としての視点で検証することが出来、長崎奉行の役割について考察を深めることが出来た。
- ・植木行宣「練り物の祭りー長崎くんち」『山・鉾・屋台の祭り 風流の開花』P.509-523 白水社 平成13年(2001)

京都祇園祭りを中心に多くの祭礼調査と研究にあたった著者が、くんちを「練物の祭り」という視点で考察している。出し物に新趣向を盛り込み生き生きと展開させるのが練物の祭りの本質であり、近世都市祭礼の原点であり、くんちは生きた練物のまつりとして現在も継続していると検証している。この論考によりくんちを「練物」(長崎では「通り物」)の祭礼という視点で検証し、他の都市祭礼と比較研究をすることが出来た。
- ・原田博二「第2章・近代都市長崎の推移と構造 第3節・文化・文政・天保期の長崎」『新長崎市史 第二巻近世篇』(長崎市2011)

くんちに関する直接の論考ではないが、寛文の大火以降の長崎の町の形成が、くんちと大きく関係していたこと、また、惣町間の連携組織として「船手組陸手組」「五町組」などととも「奉納踊町順」が組織されていたことなどが検証されており、江戸時代のくんち研究に関しては重要な論考である。

- ・永島正一著『長崎ものしり手帳』（長崎放送 1972）『続長崎ものしり手帳』（同 1977）『続々長崎ものしり手帳』（同 1983）

これらの著書は学術目的で出版されたものではないが、くんちに関する記述は、元長崎県立図書館長で大正元年（1912）生れの著者のオーラル・ヒストリーと自身の見聞を中心にまとめたもので、近代のくんちを知る上で大いに参考になった。

しかしながら、管見では、本稿で明らかにしようとする風流という視点での奉納踊の変遷や、町人によるくんち運営の実態を具体的に明らかにした研究は見当たらない。

第2節、課題と方法

本稿は長崎に400年近くにわたり受け継がれ、今日でも長崎を代表する祭礼である長崎諏訪神社祭礼（長崎くんち）について、その本質的な要素と考えられる「風流（ふりゅう）」の精神とまつりを支え続ける踊町に関し、その変遷を一次史料をもとに考察を加えたものである。本論文の主要な研究課題とその解明方法についてその概要を簡単に述べておきたい。

1、風流について

課題と方法について述べる前に、本論ではくんちを「風流」の祭礼と位置づけ、その美意識を反映させた出し物が時代の変遷でどう変化していったか、踊町の人々がどう関わっていったのか考察するものであるため、ここで「風流」についてももう少し詳しく述べておきたい。

「風流（ふりゅう）」は「風流（ふうりゅう）」、「浮立（ふりゅう）」と混同されることがあるが、前者は「上品な趣があること。みやびやかなこと。また、そのさま」「世俗から離れて、詩歌・書画など趣味の道に遊ぶこと」（『日本国語大辞典』）であり、後記は「行列のなかの華やかな一部分である風流（ふりゅう）」が、独立して芸能化したものを肥前では「肥前浮立」として総称する（『祭・芸能・行事大辞典』）ものである。風流について『邦訳

日葡辞書』には「Furiu（風流）さまざまな扮装をして道化を演ずる踊。あるいは、踊一般をいうが、それは踊のなかにはいつも趣のあることなどが含まれているからである¹¹⁾」とある。全国の多くの祭礼のルーツであるといわれる京都の祇園祭の山鉾は風流拍子舞を母体にしてつくられた。植木行宣は「山鉾はその造形において王朝以来の風流の流れを凝縮したものである。（中略）そこには競合の心が流れており、その趣向はしばしば豪華華麗を競って奢侈に流れ、あるいは相手の意表をつくことから奇抜さへと傾いていった¹²⁾」と述べている。

しかしながら、曳山、山車、屋台行事などの祭礼などをみると、巨大化されたためその風流性が固定した印象が強く、初期の風流の精神は感じられない。

山路興造¹³⁾は「風流の趣向は、本来一回性を旨として『人の目を驚かせる』ことに主眼が置かれていたはずであるが、近年、ユネスコの無形文化財に登録された『山鉾屋台行事』33件は、いずれも大型の造形物を主体とする風流系行事であり、眼目の趣向は、毎回演目を変える長浜の子供歌舞伎などを除けば、京都の祇園祭のように、早くから固定したものが多く、一回性の趣向や美意識を主眼とする『風流』の本性からすれば、固定性や普遍性を拒むことに意味があったはずなのだが、豪華絢爛さを主眼とするようになってからの『風流』は、その精神が失われてきたように感じられる。戦後に進められた文化財行政による『指定』の目的が保存にあったから、一層、一回性の趣向はなおざりにされる傾向にあった」と述べ、「ただし、京都の祇園祭では、未だに懸装品などに新しい趣向を飾ることが認められ、新しい趣向を凝らす精神が残されていることは申し添えねばならない¹⁴⁾」と祇園祭の風流は継続しているとしている。

また山路は、山鉾屋台に変容しなかった祭礼について「一方、一過性の趣向に徹した風流行列は、関西以東では『練り物』、中国や九州では『通りもの』などと通称されて、祭礼行列に参加する楽しさと、観る者への期待感を残しつつ、今日まで生き延びている」としている。

くんちの奉納踊は現在、本踊が減少し、阿蘭陀船、竜宮船、御座船、南蛮船など曳物が主流になり、「山・鉾・屋台の祭り」という面も強まってきている。

2、構成と概要

構成は以下の通りである。各章について概要を述べておきたい。

- ・序章 研究の背景と目的、課題
- ・第1章 くんちの起源と江戸期の展開・風流の開花・

幕府のキリシタン政策としてはじまったくんちの成立と、奉納踊の変遷を屏風や絵巻な

ど絵画史料を中心に考察する。また江戸期の踊町の運営を町方の記録から検証し、紀行文で江戸時代末の円熟期ともいえるくんちの様子を検証する。

・第2章 明治期以降のくんちと風流の展開

ライデン国立民族学博物館で発見された写真史料や新聞記事で明治時代のくんちの風流がどう変化していくか検証していく。

また東濱町の明治から昭和初期にかけての神事関係書類により、踊町の寄付徴収の在り方を一例として分析し、近代の踊町運営の一端を明らかにする。

・第3章 長崎の傘鉾をめぐって

当初は簡素な作りで軽々と持っていた傘鉾は風流化が進み、1人持ちの傘鉾として最大の大きさまで豪華に発展した。そのプロセスを検証した。また各踊町の傘鉾にどのような趣向があったのか、今は消滅した傘鉾も含め検証する。傘鉾の一手持ちをつとめた、榎津町高見家と紺屋町山田家の神事出納簿により富裕層の役割と貢献を考察する。

・終章 結論と今後の課題

3、課題と方法

くんちの風流がどのように成立し、変化したか、その背景となる踊町運営の実態とともに考察するものであるが、先行研究はなく、一次史料は少ない。

江戸時代の文書史料は、桶屋町の乙名藤家の文書をはじめ、町役人などが書き残した文書で、関連行事や経費などを知ることができる。しかし、町方の文書は見いだせない。大火（寛文、元禄、明和、天明）が多かったこと、くんちの踊町に該当する地区が原爆直後の火災や、長崎大水害（1982）などに罹災したこともあるだろう。また贅沢禁止令が度々発令される中で、豪華な奉納踊を出していた町方としては記録を残すことは憚られたことが原因として考えられる。

今回、調査の対象とした主な史料をあげる。

①「井上竹逸旅日記」（神戸市立博物館蔵）

井上は長崎奉行田口加賀守清行の用人として赴任し、天保10年(1839)天保11年(1840)のくんちを見物している。この紀行文により現在行われている龍踊の「くぐり」や川船の「網打ち」などの演技がすでに江戸期末期には行われ、龍踊には媽祖行列が付随していたことが確認できた。

②高見家 明治4年(1871)、明治13年(1880)の神事記録簿（長崎県立図書館旧蔵・現

長崎歴史文化博物館蔵)

長崎を代表する素封家で、榎津町の「傘鉾一手持」を務めた高見家の神事記録簿には、「人数揃い案内控え」「到来物」「傘鉾を遣ス向々控え」「傘鉾入用費」「花控え」などが綴られ、「傘鉾」の制作費や関わった人々、しきたりなどが分かる。

明治元年、九州鎮撫総督として長崎に赴任、後に長崎府知事になった沢宣嘉がくんちの改革を行い奉納踊は全廃されたが、この史料により、明治4年(1871)には旧来の形に戻っていたことが確認できた。

また、明治4年の次の踊町は明治11年(1878)のはずであるが、明治13年に踊町であることから、2年間くんちが休止されたということが分かった。明治政府は全国の祭礼に対し金銭を浪費し、かつ文明開化にそぐわないとして禁止する例があったが、くんちも何らかの影響を受けていたことが推定できた。

③紺屋町傘鉾町人、山田家の大正8年(1919)、大正15年(1926)、昭和8年(1933)御神事記録(個人蔵)

庭見せや人数揃いの調度品や茶道具、料理などのリストも記録され、傘鉾の一手持をつとめた富裕層の暮らし向きと大正期と昭和初めのくんち行事を垣間見ることができた。

高見家、山田家が両家とも質商であるが、明治10年(1877)開業した国立第十八銀行(のちの十八銀行)創立当時の株主65人のうち15人が質商であり、高見家は第3位の株主、山田家も大株主であった。江戸末期の高利貸資本が国立銀行を設立し、近代的銀行資本へと向かう基盤を担っていたともいえる。そういった富裕層が、商売の利益を町内のくんちのために還元し、振興に役立てていたのである。両家の史料により、長崎の素封家がくんちに果たした役割を詳細に考察することが出来た。

④東濱町に関する古史料計69件(「神事明細表」「土地台帳」「傘鉾庭簿」「踊り庭簿兼礼廻帳」など・長崎市歴史民俗資料館蔵)

該当史料は明治29年(1896)から昭和4年(1929)に渡る東濱町のくんち関係の文書で、古書店にあったものを平成22年(2010)東濱町が購入し、長崎市に寄贈したものであるが、今日まで内容の詳細な分析は行われていない。対象史料から、東濱町では町内寄付金は土地台帳をもとにした「宅地坪割ニ依テ募集セン金高」により金額が確定され、いわば強制的に徴収されていることが初めて分かった。明治29年(1896)は地価金額の「10分の1」、明治36年(1903)と明治43年(1910)は「1割6分」、大正4年(1915)は「1000分の22」、大正14年(1925)は「1000分の33」、昭和7年(1932)は「1000分の36」

と時代により変化している。現在の踊町運営は収入の大部分が庭先まわりの花金であるが、この史料では総収入のほとんどを町内の寄付で占めている。

⑤オランダのライデン国立民族学博物館で発見されたくunchi写真

該当写真 20 枚は、調査の結果、明治 31 年（1898）、明治 33 年（1900）のくunchiであると立証できた。踊馬場での奉納踊を撮影したものでは、もっとも古いものと分かった。これらの写真は、江戸中期後期のくunchiを彷彿とさせ、現在に至る出し物の変遷を辿ることが出来る。この中の 1 枚には、川船の屋根が開いて舞台となり、その上で踊って写真がある。これは「おどりぶね」とよばれた船津町の川船で、初めて確認された写真である。

以上の史料のうち、④は筆者が修士論文で一部を検証し、長崎市史編さん委員会『新長崎市史近代編』（2014）で一部引用した¹⁵のみで、現在までに内容の詳細な解読分析は行われていない。

⑤のライデン国立民族学博物館で発見された写真についての考察は、筆者が「写された明治の長崎くunchiーライデン国立民族博物館で発見された写真資料をめぐって -」と題し、植木行宣・樋口昭編『民俗文化の伝播と変容』（岩田書店 2017）に発表した。

①「井上竹逸旅日記」のくunchi部分、②③の高見家、山田家の神事明細書、④東濱町に関する古資料については、管見の限り論考としては初出だと思われる。

江戸時代の傘鉾や奉納踊の変遷については、主に絵画史料を中心に検証した。

明治、大正、昭和初期については、新聞記事を中心に出し物や出演者などについて調査、分析を行った。曳物に「軍艦」や「連隊調練」など戦争の影響があらわれ、くunchiが戦勝祈願の場に変化していることが分かった。

大正 13 年に催された「長崎日の出新聞」主催の踊子人気投票では、全投票数が 177,360 票にもものぼるなど、市民の関心の高さがうかがわれる。本踊の踊子は、12、3 歳から 15、6 歳の花柳界デビュー前の修業中の少女たちが中心であることが判明した。

4、本論分の表記について

本論の表記についてである。文献や新聞記事などは、「踊り町」「踊町」、「出物」「出し物」「だしもの」「演し物」「演物」、「奉納踊り」「奉納踊」、「本踊り」「本踊」、「龍踊り」「龍踊」、「しゃぎり」「シャギリ」、「出し」「だし」、「垂れ」「垂」などさまざまに統一されていない。

本文では「踊町」「出し物」「奉納踊」「本踊」「龍踊」「しゃぎり」「出し」「垂れ」の表記を使用した。但し、著書を引用した場合は、表記そのままを掲載している。

文献や新聞記事については、そこで使用された文字をそのまま記しているところと旧字や旧仮名遣いを書き換えた部分がある。また、読みやすくするため句読点やルビを用いた個所もある。なお龍踊、龍船は「蛇踊」「蛇船」と表記されていたが、蛇をへびと読み違えることを防ぐため昭和32年(1957)改められた。現表記で記載しているが、文献引用の場合はそのまま旧表記を用いている場合もある。

昭和37年(1662)住居表示に関する法律の制定で、長崎市でも翌38年(1663)から順次大幅な町界町名変更がなされたが、本論では当時の町名を用いている。

「史料」、「資料」の表記であるが、江戸、明治、大正期の文書、絵画(出版されているものも含む)は史料、他の出版物は資料と表記した。但し、論考や新聞記事の引用はそこで表記されたそのまま引用している。

文中写真は表記のないものは、すべて著者撮影である。公的機関の以外の所蔵先は一部を除き「個人蔵」と表記している。

敬称はすべて略させて頂いた。ご了承願いたい。

-
- 1 古賀十二郎『長崎市史風俗編』長崎市 1925、P. 431
 - 2 『諏訪神社実録大成』(長崎歴史文化博物館収蔵) 安政4年青木永繁がまとめたもの
 - 3 専門は日本民俗学、祭礼文化史 当時は国立歴史民俗博物館民族研究部助教授 現武蔵大学人文学部教授 祭礼関係の著書に『造り物の文化史—歴史・民俗・多様性—』(共著) 勉誠出版 2014、『ハレのかたち—造り物の歴史と民俗—』(共著) 岩田書店 2014、『江戸の祭礼屋台と山車絵巻—神田祭と山王祭—』渡辺出版 2015、『来訪神仮面・仮装の神々』(共著) 岩田書店 ほか
 - 4 専門は日本近世史 当時は国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授 現国立歴史民俗博物館館長、総合研究大学院大学教授を併任 祭礼関係の論考に『描かれた行列 武士・異国・祭礼』編 東京大学出版会 2015、『長崎くんち考 城下町祭礼としての長崎くんち』『国立歴史民俗博物館研究報告』2003、ほか
 - 5 植木行宣 元京都府教育委員会文化財保護課、当時は京都学園大学人間文化学部教授 文部科学省文化審議会専門委員等を歴任 現在、全国山・鉦・屋台保存連合会顧問、祭礼に関する著書に『山・鉦・屋台の祭り 風流の開花』(白水社、2001)『都市の祭礼山・鉦・屋台と囃子』(岩田書院、2005)『祇園囃子の源流 風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ』(岩田書店、2010) ほか
 - 6 当時長崎市立博物館館長 現在は長崎史談会会長 長崎県文化財保護審議会委員 長崎純心大学非常勤講師 『新長崎市史 第2巻近世編』(長崎市 2012) 専門部会長
 - 7 「練り物の祭り—長崎くんち」『山・鉦・屋台の祭り 風流の開花』白水社 2001、P.516
 - 8 同上 P.522-523
 - 9 『祭芸能行事辞典下』朝倉書店 2009、P.1156
 - 10 「日本の祭礼芸能の多くは、風流という美意識によって活性化し、命脈を保ってきた。この映

像では、長崎くんちの映像を通して風流の特長を明らかにしている。前半では、出し物の小屋入り（2000年6月1日）から本番（同年10月7日～9日）までを、後半では近世・近代の絵画資料及び近代の写真・映像資料を撮影して構成している」国立歴史民俗博物館研究映像「風流の祭り 長崎くんち」の説明書より 筆者は当時地元放送局に勤務しており、この映像制作にディレクターとして参加した。

¹¹ 岩波書店 1993年第3刷 P.283

¹² 『山・鉾・屋台の祭り 風流の開花』白水社 2001、P.103

¹³ 民俗学者、芸能史研究家。藝能史研究会代表。京都市歴史資料館長、京都嵯峨芸術大学客員教授などを歴任。

¹⁴ 「通りもの考」『民俗芸能研究第65号』民俗芸能学会 2018、P.44-56

¹⁵ 「第4章地域の社会と文化、第4節近代長崎の文化、1生活文化(3)長崎くんち」2014、P.408